

あ と が き

ラテンアメリカの経済開発に関する研究を志して、1997年にアジア経済研究所に入所した。翌年、ラテンアメリカの地域研究を始めるにあたって、上司から担当国を決めるようにいわれた。コスタリカを中心とする中米諸国か、南米のペルーが選択肢として示されたので、それまでに訪れたことのなかったペルーを選んだ。

大学院で開発経済学を学び、いかにして産業が発展するかに興味があった。製造業に興味があったものの、ペルーでは1990年代に進められた経済自由化の影響で国内の製造業が縮小していた。日系企業もすでに自動車や家電の組立から撤退していた。繊維や縫製などの輸出向け軽工業もあったが、成長しているという話は聞かなかった。鉱物資源が豊富で鉱業は盛んなことは知っていたが、鉱山はアンデス高地にあり、現場を目にする機会がなかった。

手探りで研究テーマを探すなかで、私の関心をひいたのが「非伝統的農産物輸出」である。1980年代から、チリや中米諸国から米国や欧州諸国に向けて、生鮮の果物、野菜、切り花などの輸出が増え始めていた。1990年代半ばには、これに関する英文の研究が数多く発表されるようになり、その一部が日本でも紹介されていた。ペルーでも、伝統的な輸出農産物であるコーヒー、綿花、サトウキビにかわって、缶詰のアスパラガスやアーティチョークが、非伝統的輸出農産物として注目を集めていた。

2000年から3年間、在外研究でリマ市に滞在したときに、海岸地域の農業地帯をみて回った。といっても、農業についてはほとんど何も知らなかった。たとえば、黄土色の畝だけが広がるホワイトアスパラガスの畑を訪れたとき、初めは何の作物を栽培しているのかがわからなかった。案内してくれた人の説明で、どうやってホワイトアスパラガスができるのかを学んだ。リマ市に近い農業地帯では、果樹や野菜の栽培のほか、その加工品の製造などもみて回ったが、その時は見聞を広める程度で終わってしまった。

農業部門のおもしろさに気づいて、本格的に取り組みはじめたのは、もう

少しあとのことである。2006年から2年間アジア経済研究所で実施された「ラテンアメリカ新一次産品輸出経済論」研究会に参加して、以前に畑を見に行ったことがあるアスパラガスを取りあげることにした。そこで統計を調べていたら、缶詰アスパラガスと生鮮アスパラガスの輸出量の傾向が大きくちがっていることに気がついた。作物は同じなのに輸出動向が異なるのはなぜか、という疑問が出発点だった。第2章に書いたとおり、缶詰輸出と生鮮輸出では商品として求められる需要の性質が大きく異なり、それぞれに適した産業構造がちがっていたのである。調査の一環として生鮮品の輸出を手がけるアグリビジネスを訪問したが、そこでみた農業は、私が想像していたものとは大きく異なっていた。

100ヘクタール程度の農場は珍しくない。大手になると1000ヘクタールを超える農場もある。圃場のすべてに点滴式灌漑のホースが並び、そのホースがコンピュータ制御されたポンプにつながっている。ピックアップ・トラックで圃場を回りながら、大卒の農業技術者から、アスパラガスの品種や栽培技術の話聞いた。オフィスでは、ビジネススクールを卒業した経営者から、コールドチェーンや航空輸送などの話のほか、市場国のスーパーマーケットに直接売込むためのマーケティング戦略の話聞いた。そこで見聞したのは、先進国市場の消費者が求める新鮮な果物や野菜を、消費者がいる場所へ、求められるタイミングで、必要な量だけ届けるという、青果物輸出産業の姿だった。種から作物を育てて収穫するまでのいわゆる農業は、その産業の一部にすぎなかった。種子、肥料、農薬といった投入財の供給、農産物の加工やパッキング、消費者に届ける物流、消費者の嗜好を把握するとともに栽培履歴を消費者が確認する情報システムなど、さまざまな部門がお互いに調整しながら発展してきた各部門のつながりが、青果物輸出産業を形作っていることがわかった。

こうして、「途上国の農業といえば、そのほとんどが昔ながらのやり方で、勘と経験に頼って自給作物を作っている」という私の先入観が覆された。そして、青果物輸出の拡大を、製造業を対象にするのと同じように、産業とし

て分析してみようと考えたのである。青果物輸出のあとは、農畜産業のなかでも工業化が進んでいるプロイラーのほか、アルゼンチンやブラジルの穀類供給の研究にも取り組んだ。

その過程で、農業部門を産業として分析するための手法をより深く学ぶため、2009年4月に千葉大学大学院園芸学研究科博士後期課程に進学した。ここではおもに日本国内の農業を中心としたフードシステムについて学んだ。2011年からの2年間、ふたたびペルー・リマ市で在外研究を行ったが、その際にはフードシステムの視点を生かして、青果物輸出産業やプロイラー産業の研究を深めたほか、ペルーの国内市場向けの青果物流通の研究にも取り組んだ。そしてそれらの成果を博士論文としてとりまとめた。

本書はアジア経済研究所で2015年度に実施した「アグリフードシステムの発展とサプライチェーンの統合」研究会の成果である。この研究会では、2015年3月に千葉大学大学院園芸学研究科から学位授与された博士論文（清水 2015）を基にして、追加調査、再構成、加筆修正などを行い、研究双書としてまとめた。具体的には以下のような変更を加えた。序章と第1章は、博士論文の序章を再構成し、加筆修正したものである。第2章は清水（2007）の構成を変更し、情報を更新した。第3章は清水（2013）を基にし、清水（2016）の内容を付け加えて再構成した。この章の研究の一部は、JSPS 科研費15K01906の助成を受けた。第4章は Shimizu y Scott（2014）に基づいて日本語で執筆した。第5章、第6章はそれぞれ、清水（2012）、清水（2010b）を基にし、一部の構成を変更したうえで、新たな調査で入手した情報を加筆した。終章は博士論文の終章を大幅に書き直した。

本書の執筆にあたってお世話になった方々にお礼を申し上げたい。ファミリービジネス研究会やラテンアメリカ新一次産品輸出経済論研究会の主査であるアジア経済研究所の星野妙子さんからは、分析の方法から研究会の運営まで多くを学んだ。このほか、同研究所のラテンアメリカ研究グループや農業・農村研究者の皆さんからは、多くの助言をいただいた。千葉大学大学院で指導教官を引き受けていただいた斎藤修先生からは、フードシステム研究

のおもしろさを学んだだけでなく、博士論文執筆の際に最後まで励ましていただいた。現地調査の際に、農業の基礎からマーケティング戦略まで、幅広く教えていただいたペルーのアグリビジネス関係者の方々にもお礼を申し上げます。

最後に、博士課程の履修や論文執筆のために多くの時間をとられるなかで、辛抱強く見守り続けてくれた妻のイリアナ、息子の拓海、そして、故郷の岐阜とリマの家族に感謝したい。

2016年11月

著者